

MUSASHINO Vol.104 *for* TOMORROW

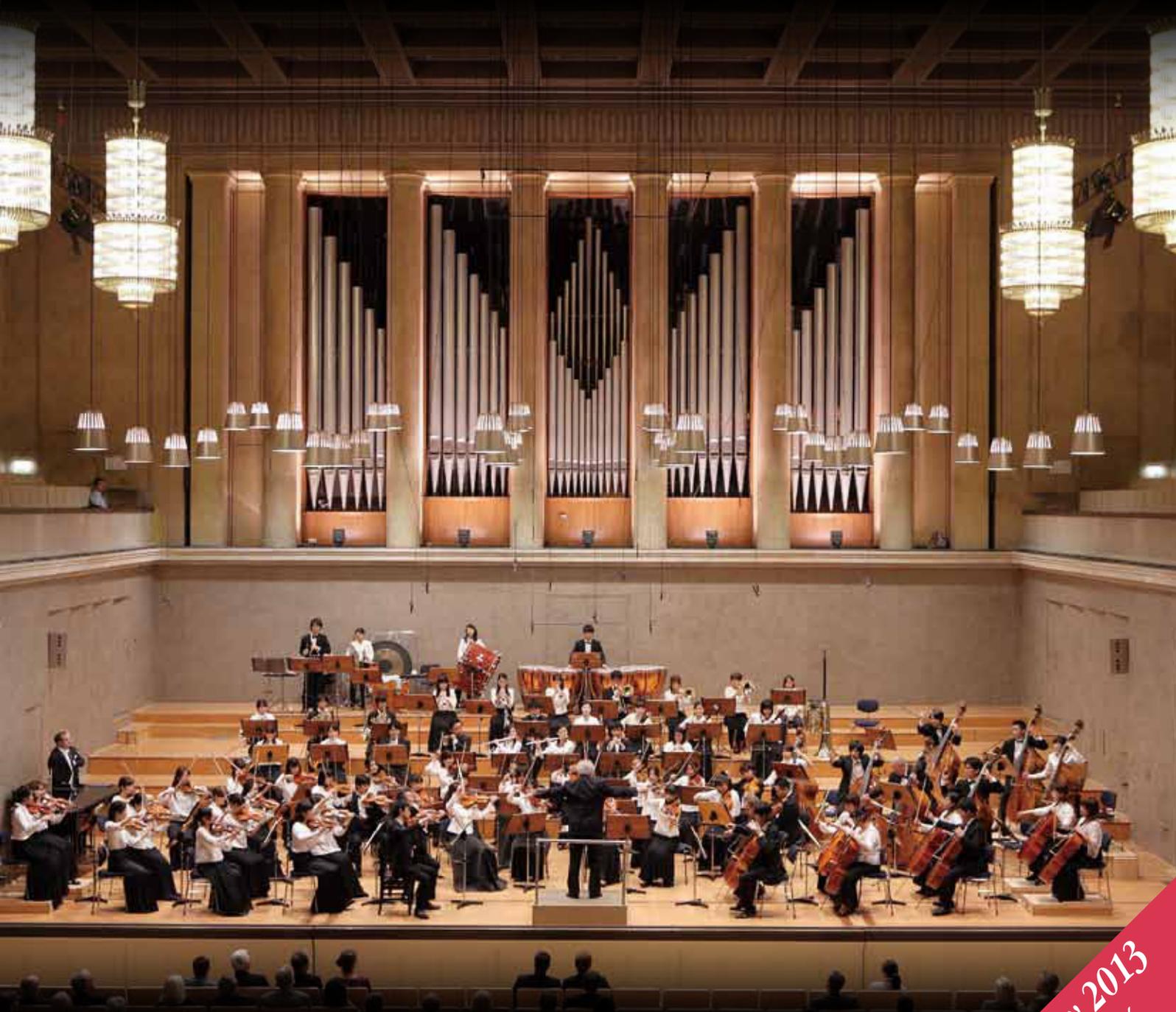
巻頭

暗号としての
〈トリストランとイゾルデ〉

金子建志

私の学園生活

音楽への想い、さらに強く
～管弦楽団ドイツ演奏旅行に参加して～



表紙：武蔵野音楽大学管弦楽団 ドイツ演奏旅行
ヘルクーレスザール／ミュンヘン（2012年9月26日）

January 2013
vol.104

謹賀新年

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井直敬



皆様には、ご健勝にて佳き初春をお迎えのことと存じます。

現在、我が国でグローバル化、情報化、少子高齢化等々、社会の構造的な変化が急速に進む折、昨年、年の瀬も迫り衆議院議員選挙が行われました。新政権には、将来を見据えた建設的、安定的な政局の運営が切に望まれます。

このような状況のもと、我が国にとって最大の課題は、将来の健全な知識基盤社会を担う秀れた人材の育成であり、そのために教育に対する期待が膨らむ反面、社会の6割を越す人々が、現在の大学教育に対して否定的な感想を持っていると聞きます。私たち関係者は、この声に真摯に耳を傾け、一層の努力を払わなければなりません。

時を同じくして昨夏以降、中央教育審議会をはじめ各界からも、教育

改革の多くの意見や提言が出されておりますので、本年は教育界にとって、将来を左右する重要な転機・改革の年となるでしょう。

さて、昨年の本学園の活動の一部をご紹介しますと、特に武蔵野音楽大学では春の4回のオペラ「魔笛」の公演、秋にはドイツへ第14回の海外演奏旅行を行い、いずれも大成功のうちに終了しました。また、内外の著名な音楽家の多数を、学生諸君への講座のみならず直接の指導のために招聘し、それぞれが行う学修成果の研究発表は、例年にも増して充実した多彩な内容となりました。更に、附属高校では新たな推薦制度を導入し、大学と高校が協力しつつ両者の連携を一層密にするよう配慮いたしました。

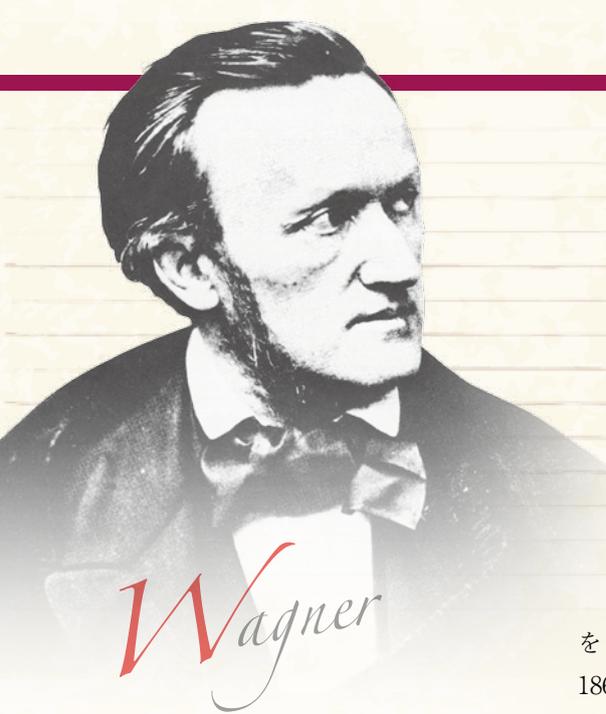
一方、江古田キャンパスに新校舎を建設するための「江古田新キャン

パスプロジェクト」は、平成29年度落成に向けて、いよいよ具体的な設計に着手する段階を迎えました。同時に、完成にいたるまでの間も、在学生諸君の学修環境に不便が生じないよう、施設・設備の整備には周到な計画を練っております。

本年も、昨年に引き続き教員の教育力向上を目指してのFD活動、また、自己点検・評価等についても、具体性をもって一層の工夫と努力を傾注する所存です。“継続は力なり”と申しますが、教職員一同、新しい年もまた教育研究の向上に鋭意取り組んでまいりる決意でありますので、皆様の変わらぬご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。



武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会 ヴェルディ「レクイエム」指揮：山下一史（2012年11月30日／東京オペラシティ コンサートホール）



暗号としての 〈トリスタンと イゾルデ〉

金子建志
(指揮者・音楽学者)

「タンホイザー」「トリスタンとイゾルデ」「パルジファル」など錚々たる作品を世に送り出したワーグナー(1813～83年)。本年はその生誕200年にあたります。記念イヤーにふさわしく、指揮者・音楽学者そして本学講師でもある金子建志先生に、ワーグナーがブルックナー、マーラーに与えた影響について解説していただきました。これを参考に、あらためて巨匠たちの作品を楽しんでみてはいかがでしょうか。

ブルックナーへの影響

敬虔なカトリック教徒で生涯独身を貫き、教会オルガニスト→大学の教員という質素な人生を送ったブルックナー(1824～96年)に対し、ワーグナーは活動も私生活も正反対。ヨーロッパを股にかけて指揮者として活躍し、ドレスデンでは宮廷楽長の身を省みずに革命派に加担して追われる身となり、亡命先で匿ってくれたパトロン、ヴェーゼンドンクの妻マチルデと恋に落ち、その不倫の恋愛から〈トリスタンとイゾルデ〉を創り出す。

ロマン派という時代の申し子と言うべき破天荒な天才にブルックナー

を結びつけたのは、師キツラーが1863年2月13日に敢行した〈タンホイザー〉のリンツ初演だった。当時39歳だったブルックナーはスコアを共に研究。これを直接的な契機としてワーグナーに開眼したブルックナーは、65年にミュンヘンで初めての面会を果し、〈トリスタン〉の初演を聴く。遅咲きのブルックナーが交響曲作曲家としてのスタートを切ったのは、この直後のこと。翌66年(42歳)に〈1番〉を完成。73年には完成済みの〈2番〉と作成途中の〈3番〉のスコアを持参して祝祭歌劇場建立中のバイロイトにワーグナーを訪ね、〈3番〉の献呈を受理されている。

その〈3番〉の第1稿は、演奏されないまま改訂されて第2稿となり、77年に初演されたのだが、ブルックナー自身の指揮の拙さ等も重なって悲惨な失敗に終わった。楽章が進むに連れて聴衆が去り、最後は十数名しか残っていなかったのだが、その中に、当時ブルックナーに学んでいた17歳のマーラーがおり、第2稿のピアノ編曲版を作成することになったのである。

死後、それも20世紀の1946年になって初演された第1稿で注目すべきは、ワーグナーからの引用が多いこと。通常演奏される第2稿では削除されてしまったそうした引用の中で特に目立つのが、アダージョ楽章の頂点で金管が強奏する〈タンホイザー〉風の主題①a(譜例はヴァイオ

リンの伴奏音型を〈タンホイザー〉序曲の形に改訂した異稿の該当箇所だが、金管の主題は同一)。

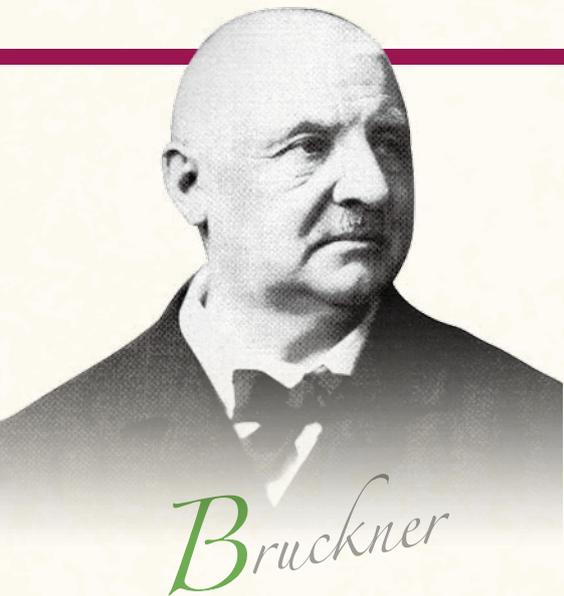
これは第Ⅲ幕の終景で、若き巡礼達、エリーザベトの自己犠牲によって若葉が生えた杖を示し「この奇蹟を通して恩恵を見出せし人の名を国中に呼び伝えよ!すべての世の上に神はあり〜」と歌う①bに由来する。

この①aは、未だ存在すらしていなかった最終作〈パルジファル〉の「信



金子建志 Kenji Kaneko

指揮者・音楽学者。東京芸大楽理科卒。柴田南雄氏に音楽理論を、渡邊暁雄、高階正光両氏に指揮法を学ぶ。千葉フィルハーモニー管弦楽団を創立し、現在まで常任指揮者を務める。市川交響楽団、アンサンブル「花火」、19世紀オーケストラ、京都フィロムジカ、狛江フィル等を指揮。武蔵野音楽大学非常勤講師、常葉学園短期大学教授。バロック～近現代の交響曲・管弦楽曲の研究と指揮活動を中心に活動し、ブルックナーとマーラーで高い評価を得ている。「レコード芸術」「音楽現代」等で批評を執筆。レコード・アカデミー賞審査委員。著書に「こだわり派のための名曲徹底分析」シリーズ(音楽之友社)、「オーケストラの秘密」(立風書房)等がある。



仰の主題」①cを先取りしているかのよう聞こえるが、源泉はバッハが〈マタイ受難曲〉で引用した17世紀の受難節コラール①dあたりで、ワーグナーがこれを長調化して①b→①cと変容させたとも見做せよう。ブルックナーは、そうした宗教音楽での引用の歴史を踏まえて、神の尊厳を表すコラージュとしたのだ(もちろん、我々の耳に①aは、ワーグナーに直結する主題として聴こえる)。

もう一つ重要なのは〈トリスタン〉からの引用。②aは〈3番〉第1稿のIV楽章・134小節〜で、これは〈6番〉のIV楽章の81小節〜②bへと継承される。これらは第III幕の終景でイゾルデがトリスタンの遺骸を前にして「柔ら

かく、静かに」と歌い始める《愛の死》の冒頭部②cに由来するのだが、ワーグナーの死を予感して作曲された〈7番〉では、単純な記号としてのコラージュから、心情の籠もった嘆きの告白へと深化する。

筆者は〈7番〉の練習で、冒頭の第1主題を振り始めたところ、あまりの平板さに愕然としたことがある。②dは主題の後半部だが、単調さの原因が伴奏部の第2ヴァイオリンのトレモロにあることに気付いた。ブルックナーが偏愛したトレモロ奏法は、音のつながりの切れ目や凹凸が消えて滑らかになる反面、弓の返しが無いためにフレーズが分かり難くなる。

そこで②eのように、フレーズを示し、そこに〈トリスタンとイゾルデ〉の引用がメッセージとして隠されていることを説明したところ、《愛の死》が、埋もれた記号から『死=彼岸』を象徴する本来の意味を取り戻し、追悼の想いを籠めたブルックナーの心情が浮かび上がってきたのである。伴奏音形に《愛の死》をコラージュとして織り込むアイデアは、第1楽章のコーダ、ワーグナーのイニシャル「W」以降で、より激しい感情表出となって再現される。

〈9番〉のII楽章スケルツォの冒頭は「トリスタン和音」で始まるが、原型の〈トリスタン〉第1幕の前奏曲のような経過的不協和音ではなく、固定化された和音として持続されるので、それとは気付かれない。しかしアダージョ楽章では「死=憧憬」の象徴として主題の形をとって再現されるので、その意味合いは歴然とする。

マーラーへの影響

マーラーは、ウィーン大学の学生として前述の〈3番〉の初演に立ち合った1877年、17歳の時に〈嘆きの歌〉の台本を書き上げる。これは〈ニーベルングの指輪〉初演の翌年にあたるのだが、20歳になって作品1として書き上げたスコアは6台(2パート)のハーブを指定していることから明らかなように、〈指輪〉の影響は明らかで、指導動機の用法も完全にワーグナーに倣っている。

ブルックナーの場合、〈指輪〉からの直接的なコラージュは〈8番〉の「ジークフリートの動機」が名高いが、マーラーの〈嘆きの歌〉では

「ウォータンの槍 = 契約の動機」の引用 = 変容に、当時の最前衛音楽からの影響が示されている。〈タンホイザー〉第III幕で、舞台裏のオケがヴェヌスベルクを再現する場面や、〈さまよえるオランダ人〉で幽霊船の合唱がノルウェー船の水夫達と渡り合う場面の異次元交錯の技法も、〈嘆きの歌〉を経て交響曲第2

ブルックナー〈3番〉第1稿・II楽章
Pos. B.

①a

Viol. I *ff*

ワーグナー〈タンホイザー〉III幕
S.

①b

f Ruft ihm es zu durch al - le Land; der durch dies Wun - der Gna - de fand!

ワーグナー〈パルジファル〉
Trmp.(F)

①c

f *ff* *p* *ff* *dim.* *p*

バッハ〈マタイ受難曲〉
15. Choral

①d

Er - ken - ne mich, mein Hü - ter, mein Hir - te, nimm mich sni
Von dir, Quell al - ler Gü - ter, ist mir viel Guts get - tan.

②a Fl. mf cresc. mf a2
Ob. mf cresc.
Klar. in B mf cresc.

②b Hrn. in F pp pp p ブロックナー〈6番〉IV楽章

②c Mild und lei - se wie er läuchelt, wie das Au - ge hold er öffnet, ...
ワーグナー
〈トリストアンとイゾルデ〉
《愛の死》冒頭

②d Viol.2 poco a poco cresc. Vc. poco a poco cresc. gezogen dim. dim. ブロックナー〈7番〉I楽章

②e Viol.2 Vc.

ランベットが静かに新たな主題③bを繰り返す。別世界から浮遊したかのように繰り返されるこのターンの音形は、それまでの Rond 主部の後半でエンドテーマ的に繰り返されてきた主題の冒頭部を拡大したものだ。

マーラーは後半の2楽章を新出主題で関連づけるといふシューマンの交響曲(2番)の方法を既に(5番)で試みていたが、(9

番〈復活〉のV楽章へと継承された。

しかし最も大きな影響を受けたのは、ブルックナーと同様トリストアンとイゾルデだ。特に完成された最後の交響曲となった(9番)では、《愛の死》が曲全体の中心主題としてインデー・フィクスの扱われているため、構造を読み解くには、《愛の死》に籠められた記号としての意味を理解することが

必須なのだ。

ただし、同じ《愛の死》でも、マーラーが(9番)で扱ったのは、ブルックナーが引用した冒頭部②cではない。一つは木管や弦によって何度も繰り返される③a。ワーグナーは〈タンホイザー〉に於ける「エリーザベットの嘆願」や、〈神々の黄昏〉のブリュンヒルデの動機のように、登場人物が真剣に愛を表す場面にターンの音型(回音=刺繍音。バロック時代の装飾音に由来する)を用いるのだが、《愛の死》で反復される③aの回数の多さは〈神々の黄昏〉の第I幕でジークフリートとブリュンヒルデの愛を濃密に表した「夜明け」と双壁であろう。

(9番)の場合③aで重要なのは、先ず、第3楽章の中間部。シンバルの一撃で台風の目に入ったみたいに騒ぎが静まり、ト

番)でも、それを継承。このターン音型は次のアダージョ楽章では、冒頭の③c+④cを皮切りに、あらゆる所で中心主題として使われることになる。

終楽章で更に重要なのは《愛の死》の頂点を刻印する主題④a。和音的に言うと「下屬和音IV→主和音I」という和声の上に、移動ド読みで「レドシラ/ラソー」という順次進行の下降音階が乗っている単純なものだが、そのインパクトは大きい。

マーラーが、この到達点④aを『究極の愛』の象徴として捉えていたのは明らかで、例えば悲劇的な闘いの

〈トリストアンとイゾルデ〉《愛の死》

③a dolce

マーラー〈9番〉III楽章
Trp. in F Etwas gehalten

③b p subito poco espressivo

マーラー〈9番〉IV楽章 冒頭 ④C 《愛の死》の主題

③c Viol. G-Saite



Mahler

〈トリスタンとイゾルデ〉

《愛の死》の主題

④a

IV I

マーラー〈6番〉III楽章

《愛の死》の主題

④b

f *breit gestrichen* p

マーラー〈9番〉IV楽章

回音による愛の主題

ヴァイオリンによる〈トリスタンとイゾルデ〉の《愛の死》の主題がシンコペーションで断ち切られる

④c

弦と木管 *ff* *rit.* *sf* *sf* *sf*

(拡大された「イゾルデの愛の死」の主題)

D durの和音 (第一展開形)

金管 (トランペット+ホルン) が天国の扉=二長調の和音を強奏し、こじ開けようとするが、そこで断裂

天国の調=二長調より半音低い主調、変二長調に到達

マーラー〈亡き子を偲ぶ歌〉

《愛の死》の主題

④d

steigernd *ff*

schein! Der Tag ist schön auf je nen Höh'n!

〈9番〉IV楽章

《愛の死》の主題

④e

Empfindung *ersterbend* *ppp*

〈9番〉I楽章「死のシンコペーション」

⑤

p

描写で埋めつくされた〈6番〉の中で、英雄が一時的に妻子のもとに戻ったかのようなアット・ホームな印象を与えるアンダンテ楽章の104小節～④bでは、家族愛的な穏やかな表現として引用している。

〈9番〉の終楽章では、まず冒頭の主題呈示③c+④cの後半で静かにしめられる。そして後半部の頂点121小節～④dでは全ての主題が統合され、指導動機的な記号としての意味を明示するのだ。

まず、回音が拡大・強奏されて愛の成就を予感させ、金管群が、輝かしい

二長調の和音で、それを支える。旋律線は《愛の死》の主題④aを拡大したものが、これをI楽章の中心主題で、シンコペーションによる断裂が破局を暗示する⑤が、巨大な

斧のように拡大されて④aを分断することで、決定的な“死の告知”が示される。

その音程はド♭=シ(ナチュラル)なので、同時に鳴っている二長調の和音(ファ♯+ラ+レ)に、口短調の和音(レ+ファ♯+シ)の陰りを与えることになり、最終的には、天国の

調=二長調(I楽章の主調)を、半音低い変二長調に引きずり下ろしてしまふ。

アダージッシモと書かれたコーダの最終頁では、自作〈亡き子を偲ぶ歌〉の第4曲《子供達は、ちょっと出掛けただけなのだ》④dからの引用④eが重要。④dの歌詞は以下とおりだ。

「彼等(子供達)は、ひとあし先に出掛けただけだ。そして、もう家に戻ろうとはしないだろう。私達は、太陽の輝く、あの丘の上で彼等に会えるだろう。今日、あの丘の上は素晴らしい天気だ」

幸福の絶頂期にあった1904年にこの第4曲を書いた後、07年にマーラーは長女を病気で失い、《子供達は、ちょっと出掛けただけなのだ》は、現実の悲劇となる。

マーラーはアンダーラインの部分を引用したのだが、両方とも、後半部に《愛の死》の主題④aが含まれていることに注意して頂きたい。アダージッシモは、〈トリスタン〉を源泉とする③aと④aが、「死にいくように」と書かれた無へと収斂していくのだが、素材としてのワーグナーの主題が、完全に新たな芸術表現へと昇華しているのは、ブルックナーの場合と同じである。



▲ 本学所蔵の音楽画
I.J.Belmont作「ワーグナー 楽劇《トリスタンとイゾルデ》第3幕終結部」

音楽への想い、さらに強く

～管弦楽団ドイツ演奏旅行に参加して～



▲ヘルクーレスザール(ミュンヘン)

武蔵野音楽大学では、音楽を通しての国際交流を目的として1977年より海外演奏旅行を実施しています。その14回目となる管弦楽団のドイツ演奏旅行が、去る9月に行われました。これに先駆けて、東京オペラシティ(9月10日)、横浜みなとみらいホール(9月11日)で定期演奏会を開催し、満を持して9月20日にドイツへ出発しました。

10月1日までの12日間、ミュンヘンのヘルクーレスザールをはじめ3カ所で演奏会を開催。リハーサルの間には、由緒あるバイロイト、シュヴァンドルフへの研修も組み込まれ、充実した時間を過ごしました。

演奏会では、本学名誉教授ヨゼフ・ツィルヒ氏、及び氏の愛弟子で、ドイ

ツ各地で活躍しているルドルフ・ピールマイヤー氏の指揮で学生達は清新な演奏を披露、その熱演に、本場のクラシックファンから心温まる拍手が送られ、いずれも大好評を博しました。また、ヴォルフラーツハウゼン、シュヴァンドルフではそれぞれ市長が演奏会にご参列くださり、地元の方を交えてのレセプションでも温かい歓迎を受けました。

参加した学生達は初めて海外を経験した者も多く、貴重な体験を重ね、国際交流の目的を果たし無事帰国しました。

今号は、異国の舞台に立つという貴重な経験をした5人の皆さんに、旅行を振り返ってお話を伺いました。(2012年11月9日収録、文責編集部)

不安と期待につつまれて

— 演奏旅行のメンバーに選ばれたときの感想を聞かせてください。

加藤 コンサートマスターとしてドイツ演奏旅行に行くこと、その責任に対して多少の不安はありました。

坂尾 掲示板に自分の名前を見つけ



たとき、純粋に嬉しかったです。でも西洋音楽の本場で演奏するという責任感やプレッシャーも同時に感じました。

町田 行けることを前回のハンガリー演奏旅行に参加した先輩に伝えたと、「海外旅行はとても楽しいし勉強になるから良かったね」と喜んでくれました。嬉しかった反面、海外は初めてですし、今まで以上にしっかり気持ちを高めて演奏しなければいけないなと思いました。

— ピアノ・ソロの山口さんと福井さんはオーディションでしたね。

山口 実は最初、ドイツに行けることを知らなかったのです。国内の公



▲ピールマイヤー氏の指導によるリハーサル風景



福井 敬介 *Kyousuke Fukui*

北海道雄武高等学校卒業。現在、武蔵野音楽大学音楽学部ヴィルトゥオーソ学科ピアノ専攻3年次在学。これまでに石村美栄、三井姿、丸山徹薫、福井直昭の各氏に師事。今回の演奏旅行ではピアノ・ソリストを務めた。

演だけだと思っていて、後で知ったときも、「やった」というより「行けるの?」という感じでした。

福井 受かるとは全然思っていなくて、結果を見たときも実感が湧きませんでした。ただ友達や先生がすごく喜んでくれて、徐々に嬉しさがこみ上げてきました。

— 今回、練習期間や練習時間はどれくらいだったのですか。

坂尾 練習は、5月のゴールデンウィーク明けから始まりました。それまでは学内オペラ「魔笛」の練習があり、普段よりも遅めの開始になってしまいました。

町田 練習時間は週2回、4時間ずつで大変でした。それでも私は打楽器



▲高さ100mを越えるレーゲンスブルク大聖堂



▲ロイザッハハレ(ヴォルフラーツハウゼン)



▲ピアノ・ソリの福井さんと
コンサートマスターを務めた加藤さん

なので降り番が多かったのですが、弦楽器の方などは4時間弾きっぱなしで、相当厳しかった思います。

— ドイツではどのような気持ちで本番に臨みましたか。

福井 雰囲気も聴こえてくる言葉も違い、すごく不安を感じました。演奏に関しても、聴衆の皆さんがどういふ反応をするのか気がかりでした。

町田 私は打楽器なのですが、向こうは湿度がないので皮の張り具合が変わってしまい、チューニングが非常に難しく苦労しました。そして、やはりヨーロッパは音楽の本場ですので、受け入れられるかどうかがとても不安でした。

坂尾 気候に関しては私も聞いていましたが、逆に乾燥しているからきっと音がよく響くだろうと先生はおっしゃっていました。ですから、どのように楽器が鳴るのか楽しみでした。

山口 ずっとドイツに行きたかったので、行く前はワクワクしていました。私が弾いたのは最後の演奏会でしたが、それまではドイツの空気を吸って、ヨーロッパの良さを体に取り込もうと意識していました。

加藤 私は学部有的时候にハンガリーへ行っていますので、思ってもみなかった2回目の海外演奏旅行となりました。学生のうちにできることを心に留めながら勉強したいという期待が大きかったですね。

— 国内公演とは指揮者が

が代わり、リハーサルの時間も十分に取れず、戸惑いはありませんでしたか。

加藤 リハーサル時間が少ないことは最初から分かっていました。ただ、その辺はツィルヒ先生もピールマイヤー先生も分かっていたらして、要点だけを簡潔に指導してくださったので安心してできました。



▲ツィルヒ先生がオルガン演奏を披露してくださったマリア教会(シュヴァンドルフ)

聴衆のあたたかな拍手

— ドイツの聴衆はどうでしたか。

加藤 ずっと拍手をしてくれたり、スタンディングオベーションしてくれたり、すごく暖かいものを感じました。

山口 休憩時間になると、ほとんど



▲ドイツの歴史を飾る人物の胸像を集めたヴァルハラ神殿

の方がお酒を飲んでいるのを見て、さすがヨーロッパだと思いました。飲んだら普通は眠くなるはずなのに、ドイツの皆さんはそのあとも一生懸命ずっと舞台上に集中してくれました。



▲ピアノ・ソロの山口さん

坂尾 日本だと、演奏する側と聴く側で距離があるように感じるのですが、ドイツでは両者に一体感がありました。演奏会は聴き手がいてこそですから、そういう意味で皆さんと一緒に音楽を作っているように思えました。

町田 年齢の幅が広いというか、年輩の方が日本よりも多いかなと感じました。そしてどの会場でも暖かく、特に最後のシュヴァンドルフではお客さん全員が立ち上がって「ブラボー」と言ってくださり、とても嬉しく思いました。

福井 お客さまがたくさん入ってくれて、迎えてくれる拍手ものすご

加藤 だんだんうまくなって行ったというよりは、毎回違う演奏の方向性やキャラクターが出たと思います。指揮者の違いも影響したのではないのでしょうか。私としては初日のツィルヒ先生の「悲愴」がすごく良くて、忘れられない演奏になりました。

— 今回のプログラム曲に対しての感想は？

福井 ドイツの作曲家であるベートーヴェンの曲をドイツの皆さんに向けて演奏できたことは、とても貴重な体験になりました。

町田 私の出番は「悲愴」とアンコールだけでしたが、アンコールの「八木節」はとても受けました。和太鼓を持って行って、法被を着て演奏したんです。

山口 ベートーヴェンを弾くことは、怖かったです。本場だから見る目も厳しいのではないかと。ただ実際に弾いてみると、厳しいけれども暖かいという、皆さんの音楽に対する想いが伝わってきました。

今後に役立つ素晴らしい経験

— 今回指揮されたツィルヒ先生、ピールマイヤー先生はいかがでしたか。

坂尾 お二人ともドイツ語で話されるということで最初は不安もあった

く暖かくて、カーテンコールも6回ほどして感激しました。

— 演奏会を通して、特に感じたことはありませんか。



山口ちなみ *Chinami Yamaguchi*

和歌山県立新宮高等学校卒業。大阪芸術大学演奏学科を首席卒業。現在、武蔵野音楽大学大学院修士課程ヴィルトウオーソコース1年次在学。第21回日本クラシック音楽コンクール第5位(1位～3位なし)。丹羽節、中村勝樹、重松聡の各氏に師事。今回の演奏旅行ではピアノ・ソリストを務めた。



坂尾佳那江 *Kanae Sakao*

徳島県立城南高等学校卒業。現在、武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科クラリネット専攻4年次在学。これまでに山崎盾之、三倉麻実の両氏に師事。今回の演奏旅行ではインスペクターを務めた。

のですが、音楽というのは最終的には言葉ではなく、体の中から出てくるものなのだなど実感できました。

町田 やはり言葉が通じないという面でもとても不安だったのですが、実際に演奏してみたら、指揮の振り方で何を要求されているのか全部分かりました。

レーゲンスブルクを流れるドナウ川





▲ ミュンヘンの街並み。ヘルクーレスザールは左の建物内にある

山口 ピールマイヤー先生はやりた
いことがはっきりしている反面、ソ
ロの部分自由に弾かせてくれる、
委ねてくれる感じがして、すごく安
心してできました。

加藤 ツィルヒ先生とは2回目なの
ですが、少ないリハーサルの時間
の中で、すごく簡潔で分かりやすく指
導してくださり、さすがだと思いま
した。お二人に共通して言えるのは、
指揮者がどっしり構えていると弾い
ている側はすごく安心できるという
こと。自由に弾いているのに、自然
といい方向に導かれる、その安心感
が抜群でした。

— 今回の演奏旅行では、それぞれ役
割がありましたね。

坂尾 道路状況によって楽器の到着



町田志野 *Shino Machida*

私立獨協埼玉高等学校卒業。現在、武蔵野
音楽大学音楽学部器楽学科マリンバ専攻4
年次在学。これまでにマリンバ、打楽器を
高橋美智子、本谷香織の両氏に師事。今回
の演奏旅行では楽器係を務めた。

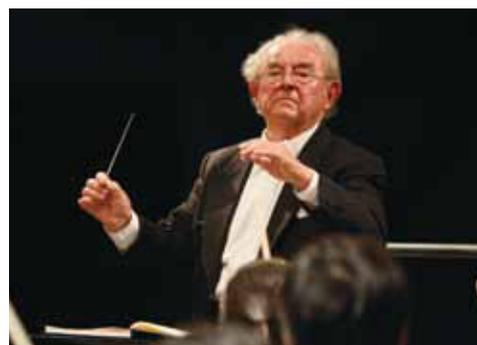
が遅れたり、ステージも会場に行か
なければ分からなかったり、という
ようなイレギュラーな状況が多くあ
り、その時々でどう対応するかを相
談しながら決めました。先生方にも
いろいろ指導していただきましたし、
何よりも一人のインスペクターの
本田君という頼もしい存在がいて助
けられました。

町田 楽器係は私の他に3人いて、楽
器管理室の先生も付いて来てくださ
いました。先生のお力添えに加え、
オケのメンバーが積極的に手伝っ
てくれたことで、スムーズに仕事が
できたと思います。

加藤 今回同行された深山尚久先生
は、いろいろな所でコンマスをや
ってきた方です。その方の隣でコンマ
スをするのができ、吸収すること
も多く、良い経験になりました。

— 福井さんはソリストとして2回演
奏しました。

福井 初めてのコンチェルトで、し
かも海外で演奏できるという経験が



▲ ツィルヒ先生

でき幸せです。ドイツで拍手を浴び
たことが忘れられなく、ぜひまたあ
の場に立ちたいと思いました。

ドイツの食・街・人

— 演奏以外の、ドイツでの出来事や
印象を聞かせてください。

福井 言葉には苦労しました。最初
はファストフード店で全然通じなく
て。でもお店の人によっては英語で
対応してくれたり、身振りや手振り
で通じたり、次第に慣れました。

町田 私も、食事のときにメニュー
を読み上げても全然通じませんでした。
もう少しドイツ語を勉強してお
けばよかったと、しみじみ思いま
した。でも、みんな優しく、とてもフ
レンドリーに接してくれました。



坂尾 食に関しては旅行に行く前か
ら不安でした。日本のようなシンプ
ルな味付けがないので胃は大丈夫
だろうか、そんな心配をしていま
した。実際はパンもお肉もソーセー
ジも、何を食べても「あ、美味しい」と。
ただ量が本当に多くて、オケのメン

バーの中には、旅行から帰っ
たら8キロも太ってしまった
という人もいます。

— ドイツの街の印象はどうで
したか。

山口 宿泊地のレーゲンスブル
クの街並が素敵でした。ホ
テルから練習場まで徒歩で
通ったのですが、どれだけ歩
いても飽きなかったですね。



▲ワーグナーがルートヴィヒ2世の援助を受け建設した、「バイロイト祝祭劇場」をバックに

日本では5分歩くのも嫌なのですけど…。建物がお洒落で、空気もおいしくて、最高でした。

加藤 レーゲンスブルクには大きな教会、大聖堂があったのですが、初めて行ったときにたまたまパイプオルガンの演奏をしていたんです。とても敬虔な気持ちになりました。

いつかまた海外で演奏を

— 今回の経験を今後どのように活かしたいと思いますか。

加藤 向こうで感じた音、出た音のイメージが残っているので、それを日本でもできるようにしたいし、更にそれをベースにしてステップアップしたいですね。そして、今回はコンサートマスターとして演奏できた経験を、今後のいろいろな演奏の場

で活かしていきたいと思います。

山口 やはり現地に行かなければ、という想いを強くしました。どれだけ写真などを見たとしても、その空気を吸うことにはかきません。ドイツで吸収できたことを、こちらでもずっと持っていたいと思います。

坂尾 ドイツに行って、その地の空気に触れ、その中で演奏するという経験をすると、音が出ているのは確かに楽器なのですが、自分の中からも音楽が自然に流れ出てくるような感覚をおぼえました。そんな感覚をずっとイメージとして留めておきたい。一度行ったことによって、憧れでしかなかった海外が、より明確なものになりました。

町田 皆さん言われているように、紙の上や話を聞いているだけだと分からないことがあります。ドイツの



加藤揚啓 Akibiro Kato

栃木県立鹿沼高等学校卒業。武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科ヴァイオリン専攻卒業。現在、同大学院修士課程ヴァイオリン専攻2年次在学。G.フェイギン氏に師事。今回の演奏旅行ではコンサートマスターを務めた。

空気や現地の人々に触れてみて、自分の音楽性とか考え方にも影響があったように思います。もう一度行きたい、今はそう強く思っています。

福井 海外は初めてだったので、どんなものなのかがまず分かりませんでした。今回ドイツという音楽の本場に行けたことで現実感が湧いて、目標がより明確になりました。

— 本日はありがとうございました。

【公演日程】

- 9/23 ロイザッハレ
(ヴォルフラーツハウゼン)
- 9/26 ヘルクーレスザール
(ミュンヘン)
- 9/28 オーベルフェルツハレ
(シュヴァンドルフ)

【指揮】

ヨゼフ・ツィルヒ
ルドルフ・ピールマイヤー

【ピアノ独奏】

福井敬介 (大学3年)
山口ちなみ (大学院修士課程1年)

【演奏曲目】

ツィルヒ
日本の印象



ベートーヴェン
ピアノ協奏曲 第3番 八短調 Op.37



チャイコフスキー
交響曲 第6番 口短調 Op.74「悲愴」



▲オーベルフェルツハレ(シュヴァンドルフ)

好演目白押し！平成24年度後期定期演奏会

昨年11月終わりから12月にかけて、武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル、管弦楽団の定期演奏会が次々に開催されました。

まず2年生メンバーによるシンフォニックウィンドオーケストラが11月9日に前田 淳准教授指揮のもと、入間キャンパス バッハザールにて、吹奏楽界で人気の高いゴープヤスミスの楽曲をダイナミックに演奏①。続いて、同じく2年生による管弦楽団が、1980年の第1回目から本学が出演を重ねる、入間市立中央公民館主催「第33回市民コンサート」に登場(11月

18日、入間市市民会館、指揮：カールマン・ベルケシュ教授)、スメタナ“モルダウ”などの名曲を清新に演奏しました。両公演とも入間キャンパスが所在する埼玉県入間市と連携し、当日は多くの入間市民の皆さんも来聴。地域と大学との交流を深める一駒となりました。

一方、管弦楽団合唱団は11月28日、入間キャンパス バッハザール、さらに11月30日、東京オペラシティ コンサートホールで、指揮に山下一史氏、合唱指揮に栗山文昭氏、ソリストに立野至美、小畑朱実、水口聡、豊島雄一と楽壇で活躍する諸氏を迎え、練習を重ねてきたヴェルディ“レクイエム”を演奏。宗教曲でありながらオペラのようなドラマティックな大作を堂々と謳いあげ、満場となった会場から大きな拍手が送られました。

また、ウィンドアンサンブルは12月18日、東京オペラシティ コンサートホールにて演奏会を開催②。今回初招聘となった米国ノーザン・コロラド



2

大学バンドディレクターのリチャード・メイン氏の指導によって緻密に創りあげた武蔵野サウンドを披露しました。E.グレッグソン“ピアノと管楽器のための協奏曲「献呈」”では本学講師の上村英郷氏がソリストとして共演。息の合った演奏で華を添えました。

さらに、室内管弦楽団が12月7日、江古田キャンパス ベートーヴェンホール③、12月14日、響の森桶川市民ホールにて、2公演を行いました。バッハ、モーツァルト、ハイドンと、室内管弦楽の魅力を存分に聴かせるプログラムで聴衆を惹きつけました。



1



3

国際色ゆたかに、秋の公開講座シリーズ

秋の深まりとともに、武蔵野音楽大学の秋の演奏会・公開講座シリーズが例年に増して多彩に開催されました。まずフランクフルト音楽・演劇芸術大学教授、ヴィンフリート・トル氏指揮による武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会①(10月5日、ベートーヴェンホール)。今回はオルフ作曲世俗賛歌「カルミナ・ブラーナ」全曲を、オルフに師事したキルマイヤー氏が編曲した、室内合唱と2台のピアノ、打楽器の編成で演奏し、新たな魅力を引き出した名演となりました。

学生の指導のために来学した世界的オーボエ奏者、インゴ・ゴリツキー氏による公開セミナー(10月17日、モーツァルトホール)では、バッハやマルティヌーなどの自筆譜と出版譜を比較研究した興味深い内容で行われました。また地域に根ざした活動を続けてきたパルナソス多摩女声合唱団(指揮：片山みゆき本学講師)の第15回記念演奏会(10月19日、シュベルトホール)が開催され、本学室内管弦楽団(指揮：クルト・グントナー教授)と共演②。合唱メンバーたちはオーケストラの伴奏に大いに感動し、

意気揚がったコンサートとなりました。インゴ・ゴリツキー オーボエ・リサイタル③(11月1日、ベートーヴェンホール)では、青山聖樹(Ob.)、岡崎耕治(Fg.)、ツォルト・ティバイ(Cb.)、岡崎悦子(Cem./Pf.)ら本学教授陣と



1



のバロックアンサンブルや、ロマン派、現代までの幅広い時代の作品を取り上げた興味深い演奏会で、多くの聴衆を沸かせました。さらに「20、21世紀の音楽」(11月2日、モーツァルトホール)と題して、現代作曲界の巨匠アリベルト・ライマン氏と、彼の弟子でベルリン芸術大学教授アクセル・バウニ氏が公開マスタークラスを開催④。ライマン氏はベルクのピアノ

ソナタの持つ精緻な構造を解き明かし、後半はバウニ氏がヒンデミットとウルマンの作品の解釈を中心にレッスンを進め、3時間にわたる熱意溢れる講座となりました。

「ニュー・ストリーム・コンサート18」(11月12日、トッパンホール)では、選抜されたヴィルトゥオーソ学科学生達によって清新な演奏が行われました。リーズ国際ピアノ

コンクールで優勝するなど、輝かしい経歴を持つ本学客員教授、イリヤ・イーティン氏のピアノ・リサイタル⑤(11月29日、ベートーヴェンホール)ではショパンの前奏曲とラヴェルの作品を美しい音色と完璧なテクニックで弾き、聴衆から感嘆のため息が聞こえるうちに、秋のシリーズを有意義に締めくくりました。



入間で、江古田で若さ爆発！ ミューズフェスティバル

昨年10月、秋空のもと武蔵野の学園祭が江古田・入間両キャンパスで賑やかに開催されました。

入間キャンパスでは「第37回入間ミューズフェスティバル」がテーマ「結(YUI) ～手を繋ごう～」を掲げ開催(10月20日・21日)。江古田新キャンパスプロジェクトに伴う変則的な修学キャンパスのために、入間キャンパスでは大学は2年次生のみが在籍という環境の中、運営面で苦労がありました。附属高等学校の生徒、武蔵野幼稚園の父母や園児たちが一体となり、日頃の研究の成果を発表する演奏会やバラエティに富んだ展示、模擬店など素晴らしいフェスティバルを創りあげました。招待演奏会では本学の堀内康雄教授のバ

リトニサイタル(ピアノ:清水 綾)、シンフォニック・ウィンドオーケストラなどの公演も行われ、訪れた方は入間の自然とともに芸術の秋を堪能しました。

一方、江古田キャンパスでは「第61回ミューズフェスティバル」が「環 - Show it -」をテーマに開催されました(10月26日～28日)。今年1年次生も加わり、学生による自主的な演奏や展示を始め、各クラブや有志団体による模擬店も数多く出店されて賑やかに行われました。またカールマン・ベルケシュ(Cl)、佐份利恭子(Vln.)、丸山由里子(Vln.)、シャンドール・ナジ(Vla.)、クレメンス・ドル(Vlc.)本学教員諸氏による室内楽やフルートオーケストラ、コンサート

バンド、管弦楽団など、色とりどりの充実した演奏会が連日開催され、例年どおり華やかなフェスティバルとなりました。

両キャンパスをとおして、武蔵野の建学の精神「和」に通じるテーマの下で、学生達と多くの先輩や来訪者の心が一つとなった、印象的なフェスティバルが成功裏に終了しました。



編集後記

ドイツ演奏旅行の座談会に出席した皆さんに、「今回の旅行の感想を一言でいえば？」と尋ねたところ、全員が一様に「楽しかった」と答えてくれました。その答えの裏には、夢に一步近づけたとい

う昂揚感、充実感がありありと伺えました。さあ新しい年の幕開けです。年末に振り返ったときに「楽しかった」と言える、実り多い一年にしたいものです(編)。

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。 学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成24年7月1日から10月31日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

【同窓生】

池田響子様 池田松洋様 石井敏子様 石黒高子様 石橋亜紀子様 板垣千穂子様 市川直子様 伊藤菊子様 岩佐未由美様 上野浩美様 遠藤陸奥子様 及川睦子様 大口光子様 岡 智恵子様 岡田弘子様 小川靖奏子様 奥田淑江様 小曾戸隆二様 小田厚子様 景浦かおり様 金井真由美様 金倉典子様 金森敏子様 金本美恵子様 香山重子様 河合宏子様 川北冠子様 川口容子様 川嶋章子様 楠山湧子様 國井真由美様 黒森陽子様 小森健兒様 坂本慶子様 佐々木 毅様 佐野直子様 沢登眞佐美様 真丸祐亨様 菅原英洋様 関川裕子様 平久麻衣子様 高野光子様 武田洋史子様 巽 篤枝様 田中晶子様 田中路恵様 田辺伸子様 玉川邦子様 手島仁美様 寺田己保子様 土井清子様 中川晴夫様 長嶋美代子様 中村裕子様 成田里桂様 丹羽 節様 法月弘子様 長谷川令子様 原 源郎様 廣瀬純子様 福井真理子様 福山朱実様 堀口真砂子様 前田栄一様 前田 保様 松田紀子様 萬田充秋様 宗片幸子様 森田久美子様 山崎葉子様 山田はじめ様 横川雅之様 吉沢頼子様 吉田厚子様 渡邊聖香様 昭和52年入学同期会様

【在学生・同ご父母】

安孫子誠也様 新井善雄様 打越孝裕様 大塚淑美様 小内宏泰様 尾花典子様 加藤直子様 加藤義憲様 唐橋道子様 川久保 篤様 小室幹生様 杉田昌俊様 鈴木崇之様 長島秀彦様 林 秀美様 原 英治様 平澤義男様 福島正三様 本間宗則様 峰 喜昭様 大和俊晴様 山本秀造様 湯澤 徹様 漁元信博様 若山智英様 和栗輝裕様

【役員・教職員・一般・他】

秋田賀文様 安孫子和子様 新井和子様 石川哲郎様 伊藤かおる様 伊東京子様 今泉裕之様 岩下恭子様 岩谷晴代様 上村英郷様 遠藤麻珠様 及川 慥様 大高 信様 大谷温子様 大呑弘通様 岡野壽子様 岡本恵子様 奥田 操様 小栗 泰一郎様 小畑朱実様 金倉えりか様 金倉英男様 金子 靖様 上運天迪子様 川崎 隆様 菊池英美様 工藤 綾様 黒川和子様 小酒理恵子様 薦田治子様 坂下 寛様 坂下裕子様 佐藤しのぶ様 重松 聡様 重松万里子様 柴田啓子様 関 千代美様 関根弘美様 高田千絵様 高柳和子様 田代慎之介様 建部美帆様 谷口雄資様 塚越淑子様 戸部 豊様 中川俊宏様 二瓶武蔵様 野村千秋様 廣瀨謙男様 福井直昭様 町田雅彦様 三木由美様 峯岸元紀様 箕田幸朗様 宮岡千栄子様 宮澤晴子様 宮西麻衣様 森永朝子様 渡辺亜紀様 渡邊公実子様 渡辺玲子様 武蔵野音楽協会代表 平良栄一様（他に匿名を希望される方32名）

平成25年度学生・生徒募集 入学試験スケジュール

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(博士後期課程)

| | 出 願 期 間 | | 試 験 期 間 |
|-----------------|------------------------|------|-------------------|
| | 郵 送 | 窓 口 | |
| 大学院博士 後期課程入試 | 平成25年2月12日消印 ～21日消印 | 郵送のみ | 平成25年 3月8日～10日 |

武蔵野音楽大学(別科)

| | 出 願 期 間 | | 試 験 期 間 |
|------|----------------------|------|--------------------|
| | 郵 送 | 窓 口 | |
| 別科入試 | 平成25年1月21日～ 28日消印 | 郵送のみ | 平成25年 2月10日・11日 |

武蔵野音楽大学(音楽学部)

| | 出 願 期 間 | | 試 験 期 間 |
|------------------|-------------------------|------------------|--------------------|
| | 郵 送 | 窓 口 | |
| 1年次 一般入試 A日程※ | 平成25年1月15日消印 ～2月4日消印 | 平成25年 2月2日・4日 | 平成25年 2月18日～23日 |
| 1年次 一般入試 B日程※ | 平成25年3月5日消印 ～14日必着 | 平成25年3月14日 | 平成25年 3月16日～18日 |
| 3年次編入 入試 | 平成25年1月17日消印 ～24日消印 | 郵送のみ | 平成25年 2月10日～12日 |

※音楽学部1年次入学試験合格者のうち、成績が特に優秀な学生合計約30名に対して、入学金相当額を「学修奨励金」として給付します。

- 一般入試A日程の受験では、国語・外国語(英または独)について、大学入試センター試験の成績を利用できます。
- 一般入試B日程の受験は、国語・外国語(英または独)について、大学入試センター試験の受験者に限ります。

武蔵野音楽大学附属高等学校(音楽科)

| | 出 願 期 間 | | 試 験 期 間 |
|----------------|----------------------|------|---------------------------|
| | 郵 送 | 窓 口 | |
| 附属高等学校 推薦入試 | 平成25年 1月10日～18日まで | 郵送のみ | 平成25年1月22日 入間キャンパスにて実施 |
| 附属高等学校 一般入試 | 平成25年 1月23日～31日消印 | 郵送のみ | 平成25年 2月10日・11日 |

* 入学試験の詳細については、各入学試験要項をご確認ください。

* 上記、入学試験は、江古田キャンパスで実施します。(附属高校推薦入試を除く)

* 各入学試験要項は、郵送及び江古田キャンパスで取り扱っています(要項・送料は無料)。要項の請求は、学園のホームページ、モバイルサイトの資料請求フォームからご請求ください。また、お電話、郵送にてご請求の場合は、氏名、住所、電話番号、および高校、大学1年次、大学3年次、大学院、別科の別をお知らせください。なお、受験講習会受講者には、第1年次入学試験要項を講習会期間中に配付します。武蔵野音楽学園広報企画室 〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125(広報企画室直通)

音楽教室(江古田・入間・多摩) 生徒募集のお知らせ

受験資格(学年は平成25年3月末現在)

| | |
|---|--|
| 導入・初級 | 導入 …………… 3才初級 …………… 4才から小学校1年生まで |
| 中級・上級コース | 中級 …………… 小学校2年生から小学校6年生まで 上級 …………… 中学校1年生から高等学校2年生まで |
| 受験コース | 武蔵野音楽大学附属高等学校受験 …… 中学校1、2年生 武蔵野音楽大学受験 …………… 高等学校1、2、3年生 |
| エクセレンス・コース (将来、演奏家・音楽家を目指す 児童・生徒のための高度なコース) | 5才から高等学校2年生まで (江古田音楽教室のみに設置しています) |

【入学試験】平成25年3月10日⑩10時(各音楽教室にて)

●ただし、エクセレンス・コースの入学試験は江古田音楽教室で行います。

【願書受付】平成25年2月12日⑩～2月28日⑩

【試験科目】実技・ソルフェージュ・面接。未就学児は面接のみ。

音楽をはじめて勉強される方は、音楽教室にお問い合わせください。エクセレンス・コースの未就学児は、実技・ソルフェージュの試験を受けてください。

【要項請求】ご希望の音楽教室へお申し込みください。

また、学園のホームページからも請求ができます(要項・送料とも無料)。

※その他詳細については、下記へお問い合わせください。

江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 入間音楽教室 TEL.04-2932-1111

多摩音楽教室 TEL.042-389-0711

武蔵野音楽大学附属音楽教室ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/music_school/

栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

(順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

- 瑞宝中級章受章 藤沼 昭彦(本学名誉教授)
- 瑞宝小級章受章 小笠原 克美(昭和35年大学卒声楽専攻)
- 2012年9月大阪府茨木市より茨木市市民栄誉賞を授与される 岸本 力(本学講師)
- オペラ・インデックス国際声楽コンクール(アメリカ) 第1位入賞
大西 宇宙(平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了)
- 第81回 日本音楽コンクール
声楽部門 第2位入賞 澤山 晶子(平成13年大学卒声楽専攻)
トランペット部門 入選 守岡 未央(平成23年大学卒トランペット専攻)
- 第22回 国際ピアノコンクール “ローマ2012”(イタリア)
ショパンライズ部門 第3位入賞 竹中 千絵(平成22年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程修了)
ソロ部門A First Prize受賞 犬飼 まお(大学1年次在学ピアノ専攻)
- 第66回 全日本学生音楽コンクール 全国大会 声楽部門 大学の部 入選
佐藤 優衣(平成23年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)
- IBLA GRAND PRIZE 国際音楽コンクール(イタリア) MOST DISTINGUISHED MUSICIANS賞、ラヴェル特別賞受賞 土師 さおり(平成4年大学卒ピアノ専攻 本高校卒 本大学院修士課程修了)、●アメリカンプロテッジ国際インターネットコンクール2012(アメリカ) アドバンス部門 ファイナリスト入賞、カーネギーホールにて演奏会に出演 土師 さおり(平成4年大学卒ピアノ専攻 本高校卒 本大学院修士課程修了)、●第66回 全日本学生音楽コンクール 東京大会本選 声楽部門 大学の部 第3位入賞 佐藤 優衣(平成23年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)、入選 黒田 詩織(平成23年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)、塚本 正美(平成23年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)、高校の部 奨励賞受賞 山崎 愛実(本高校2年生声楽専攻)、●第14回 日本演奏家コンクール ピアノ部門 一般Aの部 第1位入賞、毎日新聞社賞受賞 野上 剛(平成24年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学)、第3位入賞(2位なし) 木林 理絵(平成24年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学)、●第8回 ルーマニア国際音楽コンクール 打楽器部門 第1位入賞、ルーマニア大使館賞受賞 工藤 聖彦(平成23年大学卒マリimba専攻)、●チェコ音楽コンクール2012 ピアノ部門 第1位入賞 植田 陽香(大学4年次在学ピアノ専攻)、●市川市文化振興財団 第25回 新人演奏家コンクール 声楽部門 最優秀賞受賞 宇佐美 悠里(平成21年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了)、●第4回 東京国際声楽コンクール 歌曲部門 第2位入賞(1位なし) 糺場 芳嗣(本大学院修士課程2年次在学声楽専攻)、新進声楽家部門 入選 水津 瑠子(平成23年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)、●第17回 JILAマリimba・コンクール 第2位入賞 町田 志野(大学4年次在学マリimba専攻)、入選 加賀谷 巧(大学3年次在学マリimba専攻)、松澤 美希(大学2年次在学マリimba専攻 本高校卒)、●第15回 “長江杯”国際音楽コンクール ピアノ部門 一般の部A 第6位入賞 新井 悠美(平成24年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学)、●第13回 大阪国際音楽コンクール ピアノ部門 Age-G アブニール賞受賞 土師 さおり(平成4年大学卒ピアノ専攻 本高校卒 本大学院修士課程修了)、Age-U 入選 新井 悠美(平成24年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学)、民俗楽器部門 入選 鈴木 詩織(大学2年次在学マリimba専攻 本高校卒)、●第23回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール ピアノ部門 大学生の部 審査員賞受賞 瀬戸口 歩美(大学2年次在学ピアノ専攻)、小学生の部 第1位入賞 今成 彩乃(附属多摩音楽教室在室 聖セシリア小学校2年生)、審査員賞受賞 福光 隼(附属江古田音楽教室在室 練馬区立早宮小学校1年生)、高校生の部 入選 横地 ちひろ(附属江古田音楽教室在室 桐蔭学園高校1年生)、中学生の部 入選 海老澤 まい(附属江古田音楽教室在室 市川市立第八中学校1年生)、木管楽器部門 高校生の部 第1位入賞 浦畑 尚吾(本高校3年生クラリネット専攻)、●第3回 コンコルソMusicArte ステッラ部門 一般の部 スペシャル賞受賞 土師 さおり(平成4年大学卒ピアノ専攻 本高校卒 本大学院修士課程修了)、●第8回 エリーゼのためにピアノコンクール G部門 部門賞受賞 貝樹 琴美(大学2年次在学ピアノ専攻)、●第22回 日本クラシック音楽コンクール 地区本選会 ファゴット部門 大学の部 優秀賞受賞 後藤 亜蘭(大学3年次在学ファゴット専攻 本高校卒)、打楽器部門 大学の部 優秀賞受賞 鈴木 詩織(大学2年次在学マリimba専攻 本高校卒)、トロンボーン部門 大学の部 優秀賞受賞 若田 典子(大学1年次在学トロンボーン専攻)、ピアノ部門 高校の部 優秀賞受賞 小林 実桜(本高校3年生ピアノ専攻)、横地 ちひろ(附属江古田音楽教室在室 桐蔭学園高校1年生)、小学校低学年の部 優秀賞受賞 今成 彩乃(附属多摩音楽教室在室 聖セシリア小学校2年生)、●第36回 ビティナ・ピアノコンペティション グランミューズ部門 東日本グランミューズ1地区本選 A1カテゴリー入選 塩澤 和葉(平成22年大学卒ピアノ専攻)、東日本グランミューズ3地区本選 Yaカテゴリー 奨励賞受賞 宇多村 美希(大学3年次在学ピアノ専攻)、ソロ部門 東日本埼玉2地区本選 B級 優秀賞、特別賞受賞 奥村 陸生(附属江古田音楽教室在室 練馬区立仲町小学校4年生)、東日本2地区本選 B級 優秀賞 奥村 陸生(附属江古田音楽教室在室 練馬区立仲町小学校4年生)、青梅地区予選 A1級 奨励賞受賞 立石 龍之介(附属江古田音楽教室在室 入間市立藤沢南小学校2年生)、デュオ部門 東日本デュオ2地区本選 連弾初級A 優秀賞受賞 奥村 陸生(附属江古田音楽教室在室 練馬区立仲町小学校4年生) / 奥村 太陽(附属江古田音楽教室在室 練馬区立仲町小学校1年生)、●韓国文化芸術委員会(ARKO)管弦楽公募 当選 朴 炳五(本大学院修士課程2年次在学作曲専攻)、●多摩六都フェア フレッシュコンサートオーディション 合格 石井 智恵(平成23年大学卒フルート専攻 本大学院修士課程2年次在学)、●東京国際芸術協会 第53回 新人演奏会オーディション 準合格 清水 弘治(大学4年次在学ピアノ専攻)、●第23回 彩の国・埼玉ピアノコンクール C部門(小学校5・6年生) 金賞、埼玉県教育委員会教育長賞、ヤマハ賞受賞 カビー アレクスイー(附属入間音楽教室在室 入間市立西武小学校6年生)、●第21回 ちば音楽コンクール D部門(中学生) 第2位入賞 堀内 菜々子(附属江古田音楽教室在室 市原市立八幡中学校2年生)、●第6回 横浜国際音楽コンクール ピアノ部門 中学の部 第3位入賞 結束 真琴(附属江古田音楽教室在室 大網白里町立大網中学校3年生)、●第5回 国際ジュニア音楽コンクール ピアノE部門 第6位入賞 結束 真琴(附属江古田音楽教室在室 大網白里町立大網中学校3年生)、●第20回 ヤングアーティストピアノコンクール ピアノ独奏部門 Aグループ 金賞受賞 宇賀神 愛(附属入間音楽教室在室 西武文理小学校1年生)、入賞 佐々木 泉(附属江古田音楽教室在室 中央区立佃島小学校2年生)、優秀奨励賞受賞 大塚 琢磨(附属江古田音楽教室在室 淑徳小学校2年生)、E2グループ 優秀奨励賞受賞 大藏 朋楠(附属江古田音楽教室在室 都立大泉高校2年生)、Bグループ 優秀奨励賞受賞 波多野 大河(附属多摩音楽教室在室 多摩市立西落合小学校4年生)、●第14回 ショパン国際ピアノコンクール in ASIA 所沢地区大会 高校生部門 奨励賞受賞 市村 ひかり(本高校1年生ピアノ専攻)、小学5・6年生部門 銀賞受賞 所山 武司(附属江古田音楽教室在室 西東京市立谷戸第二小学校6年生)、小学1・2年生部門 銀賞受賞 佐々木 泉(附属江古田音楽教室在室 中央区立佃島小学校2年生)、銅賞受賞 宇賀神 愛(附属入間音楽教室在室 西武文理小学校1年生)、中学生部門 銅賞受賞 堀内 菜々子(附属江古田音楽教室在室 市原市立八幡中学校2年生)、小学3・4年生部門 銅賞受賞 中澤 真唯(附属入間音楽教室在室 所沢市立北小学校4年生)

薩摩琵琶

日本 全長94cm

四方を海に囲まれている日本は、その地理的条件から独自の民族性を保ちながらも、歴史的には幾時期かにわたって外来の文化を受容し、日本人の嗜好に合わせて変容させ、さらに細分化させて、独自の異なる文化を発達させてきたといえるだろう。これは楽器の世界に於いても例外ではない。

シルクロードを通じて東方中国に伝播した「琵琶」は、日本に入って、楽琵琶・平家琵琶・盲僧琵琶・薩摩琵琶・筑前琵琶・・・と種類に広がりを見せている。具体的には、胴の形態、柱(ブリッジ)の数や高さ、弦数、素材、撥の形状、構え方など、求める曲風・奏法などに応じて細かく変化させてきた。

多種の琵琶楽の中でも薩摩琵琶は、ひときわ勇壮である。江戸時代には、はじめ薩摩藩士が用いていたというだけあって、題材は戦記物が多く、鋭く尖った大型の撥は、細かな音を弾じたり、胴面を叩きつけるような一種の打楽器的要素を取り入れた迫力のある演奏に適している。また、柱を大きく高くしたことによって、弦を押さえる力加減で、いくつかの音高が得られるようになった。

写真の楽器には、来歴を示す書状の写しが附属されている。これによれば、もとは幕末の薩摩藩士、江戸城桜田門外で井伊大老を討ち取った有村次左衛門が所有していたものであった。その後、大正から昭和にかけて活躍した薩摩琵琶演奏家、伊達熊太郎(新蔵)の手を経て、同時期に活躍した薩摩琵琶名手、吉村岳城の手に渡ったものであり、大切に扱われていたことが窺える。さらに、昭和6年、吉村の学窓であり同じ琵琶の道へと進んだ朋友、米澤誠豊に贈られたことが、吉村自身によってしたためられている。(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)



江古田キャンパス楽器博物館休館のお知らせ

「江古田キャンパス楽器博物館」は、リニューアルオープンに向けて、現在休館中です。なお、「入間キャンパス楽器博物館」及び「パルナソス

多摩楽器展示室」は通常通り開館しています。休館中は、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

❖目次❖

- 謹賀新年 ①
福井直敬
- 暗号としての〈トリストランとイゾルデ〉 ②
金子建志
- 私の学園生活 ⑥
音楽への想い、さらに強く
～管弦楽団ドイツ演奏旅行に参加して～
- MUSASHINO NEWS ⑪
- ❖好演目白押し！平成24年度後期定期演奏会
- ❖国際色ゆたかに、秋の公開講座シリーズ
- ❖入間で、江古田で若さ爆発！ミュージックフェスティバル
- ❖武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
- ❖平成25年度学生・生徒募集のお知らせ
- ❖栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖発行❖

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2013年1月10日発行 通巻第104号



モバイルサイト
<http://musaon.jp/>